

進む生活保護切り崩し 最後のセーフティーネットはどこへ

高市和久（市川八幡教会）

安倍政権は2013年8月、2014年4月に続き、来年4月からさらに生活保護基準を切り下げようとしています。物価が上がる中でなぜ、と思われる方も多いでしょう。強引な引き下げに反対する意見もさまざまな立場から出されています。

◆生活扶助相当CPIのからくり

家賃や医療費を除く生活費として支給される「生活扶助費」は、以前は一般世帯の消費水準よりも一定程度低い水準になるように算定されていましたが、2013年以後は消費者物価指数（CPI）にある操作を加えた「生活扶助相当CPI」に基づいて増減させるやりかたに変わりました。2008年と2011年を比較して物価が下がった分だけ下げる、というのです。

生活扶助相当CPIは、消費者物価指数のうち、家賃・教育費・医療費などは、それぞれ住宅扶助や医療扶助など別立てで支給されるので除き、自動車関係費やNHK受信料なども原則として生活保護受給世帯には生じない費用なので除いて、残りの品目の価格の増減に所定のウェイトを掛けて生活費の増減を調べたものです。一見合理的なように見えますが、パソコンやテレビのような家庭電化製品のウェイトがその分だけ増えます（総合CPIでは2.11%だったものが、この操作で4.25%に）。こうした製品は近年価格が下がっているため、一般世帯以上に生活が楽になったかのような数字が出てしまうのです。

さらに、消費者物価指数の基準年は5年刻みになっていて、2008年の指数は2005年を100としたものですが、2011年は2010

年が基準になります。この埋め合わせのため2008年の指数も2010年を100とした値に変換するのですが、基準年を後ろにずらすほど下落の影響は大きく、上昇の影響は小さく出るという問題があります。例えば、100円の商品が5年後に150円になったら50%上がった、50円になったら50%下がったと普通なら考えますが、最後の年を分母にするとそれぞれ33%の上昇と100%の下落となるからです。

◆今度は住宅扶助

2014年6-8月の消費者物価指数は前年同月比3.3-3.6%の上昇となりました。中でも食料4.5-5.1%、光熱・水道6.4-8.1%など低所得層への影響が大きくなっています。当然前2回の引き下げを元に戻すべきところですが、政府にはそういう考えはないようです。

さらに、今度は住宅扶助の切り下げが議題に上りました。一般低所得世帯の家賃が平均3万8000円なのに、生活保護では4万6千円まで認められているのは高すぎるというキャンペーンが行われています。「平均」と「上限」を比べているところにこの議論のトリックがあります。低所得層では格安の公営住宅の占める割合が多いので、平均が下がるのは当然なのです。厚生労働省の調査でも、一般低所得世帯で38,123円、生活保護受給世帯で37,088円（いずれも2009年度）とキャンペーンとは逆の数字が出ています。

こうしたデータの操作を見ていると、すべての国民に健康で文化的な最低限度の生活を営む権利を保障した日本国憲法の実現するのはいつのことか、とため息を禁じえません。み国が来ますように！

●シリーズ伴走型支援(2)

ホームレス状態を脱して生活を立て直し、仕事を継続していくためには、衣食住の支援に加えて、その人のことを気にかけてくれる「だれか」が必要です。そこで注目されているのが「伴走型支援」。困窮者を生活保護などの社会的サービスにつないだ後、もつなぎっぱなしにするのではなく、継続して関わりを持っていくというスタイルです。

このニュースレターでは、現場で伴走型支援に取り組んでいる方にお話を聞いています。今回はNPO法人市川ガンバの会の職員、鮫島太さんにお話を伺いました。

——市川ガンバの会で働かれるようになったのはどんなきっかけでしたか。

鮫島 本が好きだったので、学生の時から神保町のお古書関係のバイトにほとんどの時間を費やして、大学は8年かかってぎりぎり卒業しました。卒業後もそのままやっていたのですが、結局会社がなくなって、サラリーマンをしたり古書のしごとに戻ったりするうちに

30代半ばになって、市川に住み始めて15年ぐらいになっていたんで、ひとつ市川で職を探そう、だめなら実家に帰る覚悟でと思ったのですが、この歳では厳しいものがあります。その中で、相談業という形で市川ガンバの会の求人があって、ホームレス支援というしごとはおもしろそうだし、サラリーマン時代の営業や接客の経験も生かせるかなということであちらにお世話になることになりました。

——最初から居宅者の支援でしたか。

鮫島 いいえ、最初は路上です。やはりホームレス支援を学ぶのであれば、巡回がいちばん、接しかたとかいろんなものを学習できます。彼らの悩みとか痛みとかを話す前に、まず接触を通して、少しずつ時間をかけてアプローチしていくのは根気の要る作業でしたけど、アパートに入って普通の生活をしてもらうことが路上巡回の大きな目標なので、そのときの喜びは何とも言えません。自立支援住宅にも定員はあるので、少しずつ入っていただいて、3か月間のプログラムを経て一般のアパートに移るといった形になります。

——そうすると、アパートに入るといふ決心を聞くときがいちばんうれしい時ですか。

鮫島 そうですね。上司が苦勞しながら熱意を伝えていくうちに相手との距離が縮まっていくのを見る

と、わたしもこの人はまだまだ復歸できるなというのが見えてきて、しごとに張りが出てきます。そのあたりからガンバのしごとにどっぷりはまっていった感じです。

——今はアパートに入られたあとの段階を担当しておられるわけですね。

鮫島 そうです。アパートに入るとすぐ近くに人がいて、煩わしかったりめんどくさかったりするものです。通常は何とか相手と協調してうまくかわしていくわけですけど、やはり不器用な方というのはいらっしやいます。

そのストレスからお酒やギャンブルや女性やでバランスを崩して、究極はアパートを捨てるということになるのかなと思います。せっかくガンバの会と知り合ったのですから、そこからコミュニケーションを取ってくれればいいんですけど、やっぱり不器用さがある方にはこちらから声をかけないと。だからわたしたちとしては、特別の事情がない限りあまり立ち入らないようにはしていますが、やはり声はかけ続けますよね。自分ひとりじゃないことを感じてくれて、わたしたちとうまくコミュニケーションがとれるようになったら、当然ほかの人たちともそうなれると。

——具体的にはどんな形の関わりになりますか。

鮫島 訪問に加えて、最近はやはり居宅者の高齢化で通院の同行が車の両輪になっています。やはり病院にひとりで行くのは勇気がいるし、手続きから何から、人の多さに圧倒されて途方に暮れる方もいらっしやるので、ぼくらがそばにいてスムーズにできることがいろいろあります。少しとっつきにくいお医者さんでも、わたしたちが間に入ることであれはさすってあげたりとか、せきをしていたら背中をさすってあげたりとかしているうちに、会話がつながるようになっていたり。

——電話で相談が来ることも多いでしょうね。

鮫島 でもまあ、電話で相談があった場合には必ずぼくらのほうでもじかに訪問してどういう状態か見ます。電話だけの相談は姿が見えないので、訪問してしかと本人と面談して、ときにはスキンシップとかも必要なので、痛いところがあればさすってあげたりとか、せきをしていたら背中をさすってあげたりとかしているうちに、そこまで言ってくれるならと病院に行ってくれるということもあります。

——ためらっている人に病院に行こうよと勧めることもあるわけですね。

鮫島 ありますね。本人が行く気にならないとわたしたちも連れては行けないので、時にはけんかすることもあります。こちらが必死であるということを相手にわかってほしい。やっぱりなかなか病院に行くのはみんな好きではないし、怖いじゃないですか。特に高齢者の場合は、がんだったりとなると、目の前が真っ暗になっちゃう方もいますよね。

——それは付き合っているほうもすごく重たいことですね。

鮫島 ヘビーですね。ガンバのしごとは生と死が隣り合わせのことが多くて、他人と言えは他人かもしれませんが、長いことかかわっていると情が出てくるので、人の死に接するのは、みんなそうですけど、つらいものがあります。なかなか電話が通じない、最近姿が見えないというので訪問したら亡くなっていて、自分たちのしごを全うできなかったという自責の念に駆られたこともあります。かと思うと、よかれと思って支援したことが本人には苦痛で不快で、ということをおとで人づてに聞いたり、おせっかいだ、よけいなことをするなと言われることもあります。きちんとしてもらおうのは大事なことなんですけど。

——最近では若い方の支援も増えているそうですが、支援のしかたも違ってきますか。

鮫島 そうですね、やはり就労をメインに考えますが、まずはなぜ困窮したかを本人と面接しながら理由を伺って、最初はそういう部分のケアと生活の建て直し、それがあつた程度軌道に乗ってきたらやはり就職活動で働いていただきます。若い人でも資格が必要とか、未経験者だからと断られてそこから足が踏み出せないということもあります。確かにえり好みしなければ職があることはあるのですが、将来を見据えたしごとではないのです、ほとんどが。派遣切りにしても、突然しごとを切られると、寮からも追い出されてしまう。アパートにいたとしても、もともと収入が少ないから貯金もなくてアパートを出るしかなくなる。そうやって追い詰められる環境ができていないのはあまり知られてないんです。

——そういう形で路上に出た経験があると、もう派遣はいやだという気持ちが強いですか。

鮫島 そうですね。ただ現状ではそれしかない

と。将来が見えないし病気やけがの保障もなくて、どういふしごとであれ働いている方はすばらしいし自信を持ってほしいとわたしは思うのですが、なかなか自信持って派遣ですとは言えないというのはわかります。正社員にならないかと声をかけられて喜んでいたら結局口約束だったというケースもありました。そうなる本人もモチベーションの落としどころがなく、やっぱり利益重視で、人件費を抑えて利益を出す会社が多いのは残念ですね。でも、人間のいいところは、みんなが危機に瀕しているときは一致団結して乗り切ろうという、東日本大震災もそうですが、今日本全体が苦しいときに力が出せないはずはないと、逆に会社が保障してくれることで本人たちのモチベーションが上がれば会社も伸びると思うんですけど。

——ガンバの会の存在が社会全体の雰囲気にかかわるような意味を持ってきそうですね。

鮫島 そうですね。でも本来ならこうやってガンバの会がやっていることをみんながやれないわけではないんです、ちょっと落ち着いて周りを見る余裕があれば、自分もそうなる可能性はあるんですよ、このご時世は。

——派遣切りで寮を追い出されるのは他人事ではないと。

そうです。自分で選んだ道だからしかたがないと言われるんですけど、選択肢としてそれしかなかったという方もたくさんおられます。

——最後に、今チャレンジしたいことを。

今わたしたち塾をやっている、生活困窮のために塾に通えない子どもたちの学習の機会を設けてるんですけど、学校にも行けてない子がたくさんいて、高齢でしごとがなくなった方から、だんだん若年の方、さらに子どもたちと対象が広がっています。個人に対する支援以上に、世帯を支援するのは複雑になります。わたし自身も早く父親を亡くして母子家庭の中でもやってこれたのは母親のおかげもあるし、周囲の人たちの温かさのおかげもあるのですが、このご時世はそういうつながりが希薄になって、皆さんそこまでの余裕もないのか、干渉することをめんどろに感じるということもあるのかな。でも地域で子どもを育てることも大事だと思いますね。わたしは直接の担当ではないのですが、見ていると最初ちょっと距離のあつた子たちが、どんどん変わっていくので、居宅者への支援と同じだと思います。

(聞き手：高市和久)

釜ヶ崎フィールドワークに参加して

●私がみた世界

中島紗弥（西南学院教会）

釜ヶ崎に来て、現実を知りました。

朝4時、多くの人々が今日の仕事を探していました。私はいままでそんな光景は見たこともなかったし、こんなことが日本で起こっているなんて、全く知りもしなかったので衝撃的で言葉が出ませんでした。

釜ヶ崎を自分の目で見て、私の今まで住んでいた日本とは全く違う世界だ、と勝手に思っていました。釜ヶ崎のことを知らなかったからです。知らないことは罪だ。という言葉がありますが、本当にその通りだと痛感しました。

私は以前、『隣人に出会う旅』で北九州に行って、ホームレス支援活動に参加したことがありました。炊き出しを手伝って、ホームレスの人達に焼肉弁当を配ったり、直接的な支援活動を手伝わせてもらったことを覚えています。でもその時の私には正直、偽善という気持ちがありました。『私はいい事をした』そんな気になっていました。いまなら正直にそう言えます。

今回は、ホームレスの人達への直接的な支援活動をしたわけではありません。朝早い時間に釜ヶ崎の見学をし、先生の話聞き、参加者のみなさんと話し合いをしました。釜ヶ崎という現実をまっすぐに見つめて感じたこと、考えたこと、私1人の心の中に閉じ込めたままにしないで話し合いをしたことによって、より多くのことを感じ、考え、学べたと思います。

早朝にその日の仕事を探している人がいたり、ボランティアの人達が炊き出しをしていたり、シェルターがあったり・・・、そんな場所から少し歩くとそこには、通天閣があったり、色んなお店が並んでいたりととても賑わっている場所がありました。

別世界でした。

こんなに近いのに、数分しか歩いていないのに。こんなにも違った世界が見えてしまうなんて。見えない壁で仕切られてしまっているかのようでした。

これからの私たちにこういったことが出来るのだろうか。こういったことが求められているのだろうか。それを改めて考えさせられた日々でした。とても充実した貴重な経験だったと思います。

●答えのない問い

大成 佑美（広島教会）

案内が来た時正直迷ったけれど、テーマ「原点から学ぶホームレス支援」の中にあつた“学ぶ”と言う2文字に背を押され今回参加させてもらった。中2の冬に行った「北九州・隣人に出会う旅」のメンバーとの6年ぶりの再会もあり嬉しかった。

講演Ⅰ・五石敬路さん（大阪市市立大学大学院創造都市研究科）講演Ⅱ・山田寛さん（釜ヶ崎支援機構理事長）講演Ⅲ・本田哲郎さん（カトリック神父）講演Ⅳ・吉高叶さん（連盟常務理事）4人先生方は、様々な角度から深く濃く話して下さい、多くを学ばせていただいた。また、聴くだけでなく、参加メンバーで考え話し合う時間も多かった。

2日目朝の釜ヶ崎・フィールドワーク。4時20分からの活動。奥田先生が先頭、谷本先生が最後で釜ヶ崎の町を歩いた。緊張感が漂う。ホームレスの方々の真剣な目、姿。雰囲気は圧倒された。道路はたくさんの車や小型バスが停まっていて、窓には文字の書かれた紙。黄色紙は1日の給与や仕事内容など。緑色紙は長期の仕事。白色紙は公式ではなく保証されていないものらしい。ホームレスの方々は、紙を見ながら仕事を探し車に乗って行く。

朝ごはんは、NPO運営の施設でホームレスの方々と隣合わせで一緒に食べた。フィールドワークで時折見せる先生方の険しい表情に、背負われているであろう厳しさのような何かを感じた。私は1日ここを歩いただけ。毎日のように歩いている人が見る釜ヶ崎の町はきっと違うのだろう。

今回答えの出ないたくさんの問いを抱えて帰った。ホームレス支援の問題、貧困と政治の問題、教会に託されているもの、それだけでなくクリスチャンとしての自分、人間の限界、もっとたくさんの事…一生分の問いを。

フィールドワークに参加することによって釜ヶ崎を“知る”ことが出来た。そして、その事はとても恵まれたことであると同時に知った者の責任も感じる。きっと答えは出ないと思うけれど、諦めずに悩み、考え続けることの大切さを感じる。私の心の中の殻を1つ壊してくれた3日間、時を与えて下さった神様に感謝。



三角公園で炊き出し準備を見学

*2014年3月3日～5日までホームレス支援特別委員会主催で釜ヶ崎フィールドワークを行いました。
青少年の方が多く参加くださいましたので、感想を書きいただきました。

●釜ヶ崎フィールドワークに参加して

H. O (相模中央教会)

初日、大阪市西成区、釜ヶ崎にフィールドワークより早く着いたので通称「どや」と呼ばれる簡易宿泊所で仮眠を取りました。そこは一部屋がわずか2畳、ベッドがあるだけで、水道、トイレ、シャワーは共同という過酷な環境でした。防音設備もほとんどなく、隣の部屋の人との会話も筒抜け状態でした。部屋には小さな窓が一つあるだけで何か罪を犯した人が入るかなような部屋でした。荷物をベッドサイドに置き、ベッドで仰向けになると、疲労感も重なり、なんとも言えない悲しい気持ちになりました。そして様々なことが頭をよぎりました。

「一泊2千円、一か月泊まるとなると6万円、こんな劣悪な環境でも自分の家の家賃よりはるかに高い」

「ここにずっと宿泊するってどういう気持ちなんだろう」

しばらく横になっていると同じフロアーから女の人の声がしてきました。会話の内容に耳を傾けてみると、どうやら水商売で生計を立てている人のようでした。「お金がないと住む場所さえ確保できない」そういう事実を知りさらに悲しくなりました。飲み物が欲しくなり簡易宿泊所のフロントに行くと知らない人がじっとこっちを見ています。着ているものもボロボロのパジャマのようなものを着ておりまたなんとも言えない気分になりました。また部屋に戻りベッドに横になりました。様々な考えが頭をよぎります。

「働くってどういうことなんだろう」

「生きてくってどういうことなんだろう」

そんなことを「どや」と呼ばれる簡易宿泊所で考えました。

最後に、僕自身、未だにホームレス支援に対するベストな解答は見つかっていません。今回のフィールドワークに参加して、どうしたらホームレスの解決策が見つけれせるのか模索するつもりでしたが、それはできませんでした。でも、何十年も日本に存在する問題をにたった2、3日で解決しようとするほうが甘いのかも知れません。時間はかかってもいいのでこれから先の人生でその「答え」を見つけていきたいと思えます。



本田哲郎さんのお話

●釜ヶ崎フィールドワークに参加しての感想

青木優希子 (福岡城西教会)

私はこのフィールドワークに参加するまで、釜ヶ崎の現状は本当に何も知りませんでした。2日目の朝はやく、センターを中心とした釜ヶ崎の街を見学して初めて、貧困という問題の大きさを実感させられました。この3日間で経験したことはきっと一生忘れないと思います。

「貧困」と言われても、これまで日本は豊かな国であるイメージしかなかった私にとってはまったくつかめないテーマだと思っていたのですが、五石さんのお話の中で女性の貧困、ひきこもり問題など、非常に身近な問題もたくさんとりあげられていて、決して他人事にはできる問題ではないのにあまり注目されていないということに驚きました。社会から排除された人々が社会に関わっていくことがこんなに難しいこととは思いませんでした。

3日間いろいろなお話を聞いて、産業の構造の問題から学び、これからの社会でどのように誰もが抑圧せず、抑圧されない社会を作っていくか考えました。山田寛さんのお話の「釜ヶ崎は日本の将来が集約された場所」という言葉がずっと胸にひっかかっています。私たち若い世代がこれからの日本社会を変えていかなくては、と思っただけでも具体的にどうしたらいいのかわからなくて悩みました。釜ヶ崎の上に成り立っている現代社会のこと、全国が釜ヶ崎化していくこと、扱う問題は、根本は簡単なことでありながら簡単には解決されないことばかりで、自分の無力さにふがいなさを覚えました。

また、本多哲郎神父のお話もふだんは考えたことのないような新鮮な視点からの非常に興味深いもので、自身の信仰のありようを見つめ直すよい機会となりました。

この3日間で見たことを忘れずに、これからたくさんの方のことを学び、人間の尊厳がいつも守られ、白いものが白、黒いものが黒とされる社会に一步でも近づけるよう働きかけていきたいと思いました。



シェルター

●釜ヶ崎フィールドワークに参加して

●釜ヶ崎フィールドワークの恵み

中西 奏(上尾教会)

今回このフィールドワークに参加して、私は頭がパンクするくらいたくさん話を聞きました。本当は全部書きたいところですが、ここでは特に印象に残った2日目の本田哲郎神父の話について書きます。

本田神父の講演では、“上から目線の親切”という言葉について考えさせられました。本田神父がホームレス支援として炊き出しなどを行っている中で、ある路上生活者からこんな言葉を言われたそうです。「ありがとう。でも、こうやっておにぎりをもらっている姿を自分の娘には見られたくないな」と。無神経な支援は“受ける”側に辛さを与えてしまい、“してあげる”という姿勢では、“上から目線の親切”になってしまうのだと考えさせられました。でも“上から目線”でない親切とは一体何だろう、と考えると、中々ピンときませんでした。“親切”というものの在り方について問われる話でした。

そしてこの本田神父の話の中で、私は今までにない大きな衝撃を受け、自分の中の“信仰”というものの概念、前提が壊された感覚を覚えました。自分がこれまで考えていた神様と、本田神父の考える神様とのギャップに、ショックをうけてしまったのです。しかし、こんな状況の中私が恵まれていたのは、この様々な疑問をぶつける相手がいたこと、話をたくさん聞いてくれる人がいたことです。そうすることで、私は自分にとって新しい考え方をたくさん知りました。自分とは違う角度から見た意見を聞くことは大切なのだと感じました。

今、こうして混乱している私にとって、励ましとなっていることがあります。最終日の吉高先生の話で、ご自身も信仰生活において“前提の崩壊”を体験した、という話がありました。私と同じように自分の中の前提が崩壊して、それでもそこから何かに気付いて、今現在牧師先生をしている人がいる。その事実が、私にとっては不思議でもあるし、励ましでもありました。

今回この旅で私はいっぱい傷付きました。「気付くことは傷付くこと」。この言葉を嫌というほど実感しました。でもその傷は教会で背負っていけばいいと分かったときは、どこか安心させられました。

今回この旅で得た多くの疑問・課題を、これから長い時間をかけて考えていきたいです。

最後になりますが、私はこの旅に参加して良かったと、心から思っています。ショックなことも多々ありましたが、それはきっと私にとって必要なことだったのだと、そう思えるようになってきました。

この旅に関わってくださった全ての方々に感謝です。

●続いている「隣人に出会う旅」

花岡真琴(佐賀教会)

5年前の北九州の「隣人に出会う旅」から、私の隣人に出会う旅が始まった。私の心のどこかに北九州で出会ったおじさんたちが留まり続け、その出会いが私を北九州に導き、今もその出会いは続いている。

今回のフィールドワークでは、釜ヶ崎が労働者の街であることや作られた街であることを現場で見ることが出来、私が求めている地域福祉とはどんなものかを考えさせられるような貴重な講演を聞くことが出来た。社会について何にも知らない自分や今の自分の課題を明らかにされるような釜ヶ崎でのフィールドワークは、衝撃的で情報量も考えることも多い内容の濃い体験だった。今の私は自分のことで悩んだり考えたりすることに精一杯で、私という自分自身の枠の中でだけ考えている。しかし、「原点から学ぶホームレス支援～貧困時代にわたしの教会は何を託されている？」というこのフィールドワークのタイトルにもあるように、私の教会、私たちの～という見方で課題を引き受け、考える「私」にならなければいけないと痛感した。そして、神様の前に一人立つことを迫られると同時に、人と出会うこと、教会と出会うことを迫られていると感じた。自分を見つめることだけでは自分しか見えてこないから、考えることだけでなく今は一歩踏み出して動いてみることも大切にしたいと思う。

私が北九州で炊き出しやパトロールにボランティアとして参加する中で、私には帰る場所やお風呂、あったかい布団があっても、おじさんたちにはないという現実を突きつけられる。私がどんなにおじさんたちのことを想っても、私がどんなに頑張ろうが努力をしようが私の行動は罪人の行為に過ぎないという現実を私は生きなければならぬ。しかし、私は弱さや罪を引き受けてもらった。そして、これからも引き受けてもらい続けるから、私は苦しい現実に向き合うことから逃げたくない。ゆるされた罪人という私として北九州でこれからも隣人に出会う旅を続けていきたい。



釜ヶ崎の朝

●釜ヶ崎を通して語られた事

～谷は全て身を起こし、山と丘は身を低くせよ

日高嘉信(花小金井教会)

私は釜ヶ崎という場所を聞いた事も見た事もありませんでした。なので、今回の旅でこの場所や、日本の貧困問題の現状等様々な事を知る事が出来たことは非常に幸運だったと思います。今の私に何が出来るのかは分かりませんが、これからはもっと積極的にこの問題に関わっていきたくと強く願いました。

私が今回の旅で特に印象的だったプログラムは長年釜ヶ崎でホームレス支援を行われている本田哲郎神父の話でした。彼はホームレス支援を通して、ホームレスという境遇の違う相手との関わり方について聖書の一節を用いて説かれました。その聖書の箇所とは、イザヤ書40章4節に記されている「谷は全て身を起こし、山と丘は身を低くせよ」です。支援する側と支援される側、一見力関係がある両者が対等な立場に立つためには、神様の前で、お互いが同じ目線になる様に努力する必要があるとおっしゃっていました。

私はこの話を聞いて、自身のキリスト者としてのあり方を問われた気がしました。私はまだ神様と出会っていない方と話す時、相手にあわせて話していました。つまり、自身をキリスト者として公言せず、接していたのです。しかし、それでは良き関係を結ぶ事が出来ませんでした。私はその原因がこの対等な関係に立っていなかったところにあると考えます。私は相手にもっとキリスト教に対して理解を求めべきだったのです。そうする事で、相手に自身を理解してもらい、良き関係を構築し、それが神様を理解してもらえる事に繋がるのだと気付きました。

釜ヶ崎という場所は支援を通して、社会問題に関わると同時に自身のキリスト者としての生き方を見直す場所でもありました。これからはもっと積極的に社会問題に関わっていき、その中でキリストの愛や神様を広めつつ、自身のキリスト者としての歩きも見直していきたいと思えます。

●まだまだ知らないホームレス支援

「高金利ってなに？」

「彼らは貪欲に畑を奪い、家々を取り上げる。住人から家を、人々から嗣業を強奪する。(ミカ2:2)」…この蛮行は、はたして特定の圧政者によるものなのだろうか、という問いかけをホームレス支援委員会 高市委員長より受け、私は今まで当たり前のように読んでいた聖書の読み方が問い直されています。釜ヶ崎先のホームレス支援機構理事長の山田賢さんによれば、戦後日本の経済高度成長の陰には、“安価な”労働力市場があったのです。だとしたら戦後好景気を支えてきた高金利に、生活の安定を託してきた一般庶民の生活もまた、“安価な”労働力市場を押し進めてきたのではないのでしょうか。そして みことば(出ヅプト22:24、レビ 25:36)が、利子収入によって隣り人と共に生きる平和が破壊されるという警鐘を鳴らしてくれていたことを思えば、教会こそがもっとこの問題と真摯に向き合い、日本社会に問うべきだったのではないのでしょうか。そして今、アベノミクスが約束する経済効果として、“賃上げ”が吹聴されている陰で、今度は誰が、その労働力を安く買ったか、家庭崩壊・喪失へと追いやられようとしているのでしょうか。(左右田理・八王子ゆめじろ台教会)

●「釜ヶ崎の街を歩いて」

市川詩音(ふじみ教会)

この3日間の釜ヶ崎でのフィールドワークでは、たくさんの出会いと問いをいただきました。今回のフィールドワークの参加者には、隣人に出会う旅北九州のOBがたくさん参加していて、にぎやかで刺激的な学びの時でした。この3日間の学びで特に印象的だったのは、やはり早朝の釜ヶ崎の街を皆で歩いた時でした。まだ寒さの厳しい冬の空の下、日も昇っていない暗い街にはもう人々の姿があり、その風景は不思議なものでした。街を案内してくださった釜ヶ崎支援機構の山田さんは、釜ヶ崎という街がこの社会のあまりにも理不尽な構造の中で必然的に在り続ける街(在り続けなければならなかった街)であり、この街を必要としてきたのは私たち自身なのだとお話になりました。とてもショックでした。そこには、現代の便利で物質的に豊かな暮らしと引き換えに、人々の目から隠され続けてきた果てしない闇があったことを初めて知らされました。講演をしてくださった本田神父が、活動を始められた当初に「いつまで炊き出しを続ければこの街からそれを必要とする人々はいなくなるのだろうか」という葛藤の中に置かれたと言われていたのを思い出します。

山田さんは、いつかこの時代が崩れていく時に、最も犠牲の少ない方法を今から考え、実験していく必要があると言われました。これからの時代に、教会はこの地においてどのような存在となっていくのでしょうか。大きなテーマをいただいたように思いました。この出会いと学びに感謝します。



生活道路清掃事務所

●ホームレス支援特別委員会2014フィールドワークのご案内

伴走する教会を自ざして一貧困時代に問われるもの

非正規雇用への傾斜がますます強まり、多くの若者が行き場を失って不安を抱えています。聖書から、社会科学から、現場の経験から、この時代はどうとらえられるでしょうか。北九州市立大学の稲月正教授（社会学）、経営するガソリンスタンドに少年院の出所者を積極的に雇用する野口義弘社長、抱撲館北九州のスタッフの方々のお話を通してわたしたちが置かれている状況を知り、教会に求められる働きを考えていきます。昨年度に続き、青少年（少年少女・学生青年）には交通費を補助します。ご参加をお待ちしています。

1. 日時・場所：2015年3月23日(月)14:00～25日(水)12:00 東八幡教会・抱撲館 ほうぼく

2. 参加費：宿泊あり 10,000円 食事代は別途必要です

宿泊なし 7,000円 食事代は別途必要です

講演のみ 1,000円（1講演につき）

*青少年の方は参加費無料（食事代は必要です）、青少年への交通費補助あります。

3. 申込み締め切り：2015年1月末日 宿泊は定員（30名）になり次第締め切ります。

4. 申込み先 日本バプテスト連盟ホームレス特別委員会宛（中嶋）FAX 048(883)1092

3月23日(月)	3月24日(火)	3月25日(水)
(10:00 委員会)	9:00 礼拝(田口嗣業)	9:00 礼拝(岩崎一宏)
	10:00 生笑一座公演	9:30 討論とまとめ(谷本仰)
	12:00 昼食(抱撲館)	11:30 閉会礼拝(左右田理)
13:30 受付	13:00 笑えるだしまき玉子 見学	(13:00 委員会)
14:00 開会礼拝(高市和久)		
14:30 ウェルカム (自己紹介)	14:30 ワークショップ、 グループディスカッション	
17:00 東八幡教会、 抱撲館見学	17:00 公開講演 野口嘉弘氏(野口石油社長)	
18:30 夕食(抱撲館)		
19:30 公開講演 稲月正氏(北九州市立大学)	19:30 夕食(抱撲館)	

<申 込 書>

(該当するところに☑してください)

ホームレス支援特別委員会2014年度フィールドワークに参加を申し込みます。

宿泊あり

宿泊なし

講演のみ(23日)

講演のみ(24日)

教会・伝道所() 参加者氏名()

牧師(教会代表者)の署名()

電話(自宅または携帯)()